

中村桂子先生からいただいた要旨

〈コロナ禍を契機に見えてきた教育の本質〉

人間は生きものという視点を基本に、すべての人が毎日を生き生きと生きる社会をつくりたいと願っています。現代社会は、制度も具体的活動も一つの物差しで測った進歩をよしとし、そこでの競争を求めており、一人一人を大切にはせず、教育も然りです。

動物の子どもは遊ぶのが好きで、そこで親や年上の真似をして学び、一人前になっていきます。生きものの特徴は、自ら成長することであり、これを「<sup>な</sup>生る」と呼びます。植物の実が生る（なる）というように、動物に限らず、生きることの本質です。

ところで、教えるのは人間だけ。そこで私たちは人材育成などと言って社会の価値観に合わせて人を「つくる」ことにしました。もし教育が「つくる」ではなく「生る（なる）」を助けるものとして行われていたら、コロナ禍での一斉休校は興味深い成果が見られるチャンスだったでしょう。マイナスが顕在化したのはなぜか。考える必要があります。